



ブリュエゲルの「子供の遊戯」 4

——子供椅子からお粥フライのかきまぜごっこまで——

森 洋子

16、子供椅子 Kinderstoel (図1)

ブリュエゲルの「子供の遊戯」の最前景の中央左寄りに、座部に穴のある小さな椅子が置かれている。この絵の個々の遊びの内容や玩具について詳しく解説した研究書の中でも、なぜかこの椅子について言及しているものがひじょうに少ない。わずかにド・マイヤーが短い説明を加えているだけである。^{注1}それによると、この「子供椅子」は戦前ではフランドルの農村でまだみかけたが、実

際には使用されず、子供の遊び道具であったという。とくにようやく歩けるようになった幼児がその中に入り、厩舎、乾草の納屋、中庭などを座ったまま、動き回ったという。

しかしこれは今日ベルギーでいわれる Kakstoel (おまる) ではないだろうか。一昔前までこの椅子は実際に使用されていた。木製でできていて、底部はなく、穴のある座部の下に金属でできた Pispot 便器を置いて子供に用便をさせたのである。^{注2}



図2 ヒエロニムス・ボス「大食」
 (「七つの罪源」の部分) 15世紀後半



図1 ブリュエゲル「子供椅子」
 または「おまる」(「子供の遊
 戯」の部分)⑩

ヒエロニムス・ボスの「七つの罪源」(十五世紀後半)の「大食」にも、背もたれのある「子供椅子」Kakstoelが画かれている(図2)。この画面の小さな子供は暴饮暴食の父親に似て、すでにかかなりの肥満児である。今まで温和しく子供椅子に座っていた子供が、父親が食事を始めたので椅子から立ち上がり、食物をねだりに行く、という情景が画かれている。

17、「いくつもっている」または「奇数か偶数か」

Zooveel af, zooveel bij, Paar of unpaar (図3)

この遊びには二通り知られている。

A、ブリュエゲルの絵では、男の子と女の子(ド・マ
 イヤーは二人とも女の子と見ているが、筆者は右側の青
 い服の子供はその体格から男の子と考える)が手の中の
 ものの当てっこ遊びをしている。男の子はまず両手を後
 に隠し、それから左手の中にナッツ、おはじき、小石、
 どんぐり、豆、桃の種、小銭など堅くて小さいものなら
 なんでもいいが、そのいくつかを隠し、女の子の目の前

に出す。もし、女の子が手の中の数を云い当てたら、それを全部与えなければならぬ。逆であつたら女の子はその数の分の罰金を払う。

この遊びにはつぎのような歌が知られている。

「ホーテ・バトーン、

一番よいナッツがあるところ、

ここ、あそこ、

一番よいお手々を開けさせよう。^{注4}



図3 ブリュージュル「いくつも持っている」
（「子供の遊戯」の部分⑩）

この遊びは季節に関係ないが、ただ隠す対象は桜んぼの季節にはその種、榎の実の時期にはどんぐりという風に、その時々で一番入手しやすいものが選ばれる。

女の子は手に赤い袋をぶらさげているが、すでにいっぱい詰まっているようだ。男の子は紙の冠をかぶっているが、34番のパンをもつ男の子のそれに似ているため、特定の季節に関係しているのだろう。というのは同じ冠がブリュージュルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」や月曆画シリーズの「暗い日」にも見出されるからである。後者二点では謝肉祭のときに子供のかぶる「東方三博士」のそれではないかと推論されている。しかしこの「子供の遊戯」でも、それと同じ季節かどうかは断定できない。

B、手の中に隠した数ではなく、奇数か偶数かだけを云い当てる遊び。

この遊びの歴史はひじょうに古く、ギリシャ時代ではアリストテレス、アリストファネス、プラトンなどから Artasmos と、またローマ時代ではホラティウスやオウィディウスらから Par impar と呼称されていた。^{注4}

十四世紀にオランダのレイデンでひじょうにこの遊びが流行し、おそらく、日本での「丁か半」といった賭博にまで発展したのであろう。ついに一三九七年、同市の半マイル半径内で、サイコロ、トランプ、コインなどを投げてのこの遊びは、法的に禁止されたのである。

ラブレリーの『ガルガンテア物語』の「第二十二章」でも、「丁か半か」「裏か表か」という遊びが列挙されている。^{註。}このほかドイツでは Gerad oder Ungerad、アメリカでも Odd or even などと呼ばれるなど、この遊びは実に世界的な遊戯といえよう。

18、棒馬「じっじ」Stokpardje (図4)

16番の「子供椅子」のすぐ側で、男の子が鞭をかざして棒馬遊びをしている。画面に画かれた玩具はかなり上等で毛質のたてがみ、鬃、手綱までも備えられている。

この玩具は今日では図5のように、棒の先に車輪のついたものもあるが、当時から一般に身体部は一本の棒だけの単純な木製のものであった。また子供たちは棒馬の代



図4 ブリュエゲル「棒馬ごっこ」
(「子供の遊戯」の部分⑱)

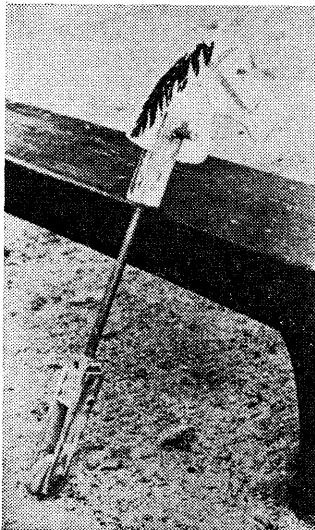


図5 「棒馬の玩具」
20世紀の前半, 1.82m



図6 ブリュエゲル「棒馬ごっこ」(「シント・ヨリスの縁日」の部分) 銅版画

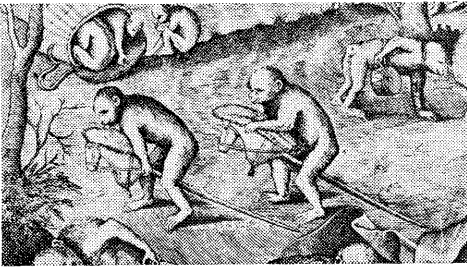


図7 ブリュエゲル「棒馬ごっこで遊ぶ猿たち」(「猿に荒される行商人」の部分) 銅版画

わりに帚の柄や長い火かき棒で遊んだりしたらしい。西
欧には中世騎士道の伝統があるだけに、この棒馬ごっこ
は男の子の人気遊びのひとつだったことは以下に掲げる
種々の作例からうなずけよう。

ブリュエゲルの銅版画「シント・ヨリスの縁日」
(図6)で、兄妹が一本の棒馬にまたがって広場で遊んで
いる。また同画家の別の銅版画「猿に荒される行商人」

(図7)をみると、三十四近い猿たちが、昼寝をしている
行商人の背負籠から商いの品を取り、勝手に遊び回って
いる。その中の二匹は棒馬にまたがり、人間の子供を真
似して行進している。こうした猿の棒馬遊びは、同時代
の画家ピーテル・ヴァン・デル・ボルフトの「猿の遊戯」
にも見出される(本誌、一九八一年九月号、図12参照)。

中世のドイツ文学の中でも棒馬で遊ぶ少年の気持が
歌われている。ミンネジンガーのハルトマン・フォ
ン・アウヴェ(一二〇〇年)は貴婦人に対する少年の
敬愛をこう記した。

「私が棒の上にまたがったときから、

一生懸命に任えた女の人は、

私に再びやさしい言葉をかけてくれた……^{注7}」

ヒューゴー・トリムベルク(一三四七年)は子供と
遊ぶ老人を揶揄しながらこう歌っている。

「老人が棒の上にまたがる子供たちと一緒にハイド
ウドウをやった。

それから丁半ごっこで遊んだ。



図 8 「紅潮した魂の状態」(『太陽の光輝』より)
1582年 ドイツの写本

子供たちと水浴びに出かけた。
子供たちがお家作りをするのを手伝った。
二匹の小さなねずみを紐で結び、
子供たちと少しばかり散歩した。
だから僕らは言ったのさ。『みてごらん、なんて馬

鹿なのだろう。あの老人は^{註8}……』。
なお十六世紀前半にドイツで『太陽の光輝』^{註9}と題される錬金術の書が著わされた。本誌に掲げる図版は一五八二年版のものだが、その中で「紅潮した魂の状態」について^{註10}の全頁大ミニアテュール(図8)には、母親の乳をふくむ赤児(この行為は錬金術で増殖化を意味する)のほか、幾人かの子供たちが窓から差し込んだ太陽の光のもとで風車、櫓すべり(ただしクッションを代用して)とともに棒馬遊びをしているのがみられる。

十六世紀の詩人ジャック・ステラは、とくに棒馬ごっこを他の遊びと區別して「お馬ちゃん」(図9)という詩でこう歌っている。

「どの子供も各々、雀、犬、猫、赤
ちゃん人形、お人形で、
喜々として遊んでいる。

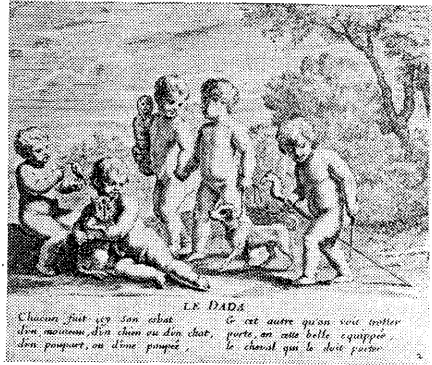


図9 クローデイン・ブズネ・ステラ
「お馬ごっこ」(ジャック・ステラ
『子供の遊戯と楽しみ』1675年より)
銅版画

カートをはいている。ブリュエゲルの時代もふくめ、十七世紀オランダでは七才位まで、男の子もスカートをはいていた。いや第二次大戦まで、オランダのある特定の地域、例えば、マルケンヤスタポルストでは男の子もスカートを付けていたという。^{註11}しかし十七世紀の版画やタイトル画にみられるようにスカートを付けても帽子に羽根をつけているのは男の子なのである。

同じく十七世紀のオランダの詩人ヤコブ・カッツは、大人の世界での誤謬や愚行を子供の遊戯に準えて教訓詩を書いた(ただしカッツはすべて子供の遊戯をベシミスティックに観ているわけではない)。彼は「棒馬ごっこ」をとくに大人の非現実的な夢のアナロジーとみなしている(図14、15)。

「棒の上に乗ったり、

小さな棒切れで棒馬を鞭打つ子供は、

自分の駆いているのは勇氣ある駿馬で、

フランスの数クローネンに価すると思っている。

しかしよく見れば誰でも、

速歩で駆けるもうひとりの子供は、

楽しく行進をしながら、

自分を運んでくれるはずの馬を、

運んでいる。^{註10}

同時代のオランダのタイトル画にも、棒馬遊びの子供が画かれているが、その棒馬の頭部には様々なヴァリエーションがあることが知られる(図10、11、12、13)。

この遊びは男の子のものだが、タイトル画での彼らはス



図11 「棒馬ごっこ」 17世紀中期
のオランダのタイル



図10 「棒馬ごっこ」 1625年頃
のオランダのタイル

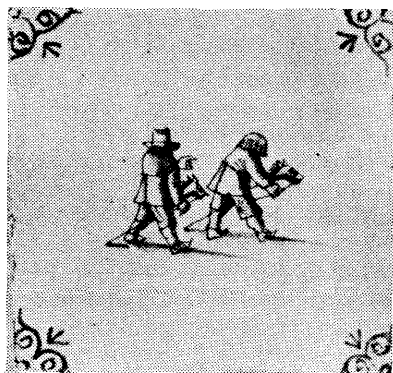


図13 「棒馬ごっこ」 1675年頃の
オランダのタイル



図12 「棒馬ごっこ」 17世紀中期
のオランダのタイル



図15 E. シリマン「棒馬ごっこ」(J. カッ
ツ『結婚について』1642年より) 銅版画



図14 「棒馬ごっこ」(J. カッツ『道徳と
愛の像』1622年より) 銅版画

それはただの木片にすぎないことがよく分かる。

どんなに多くの人々が棒の上に乗ることだろう。

どんなに多くの人々が丸太の上に座ることだろう。

どんなに多くの人びとが沼地に住むことだろう。

みんなそこが王様の座だと思っている！

多くの人びとは足で歩いているのに、

馬を駆いていると思っている。

彼らの馬、それは高慢という馬なのだ。^{注12}

19 子守り Koele-Koele meien (図19)

二人の年長の子供たち（右は女の子、左が男の子）が手を合わせ、その上に幼い女の子を座らせて運んでいる。二人とも空いている方の手でしっかりと女の子の手を押えている。おそらく体を揺らしながらこう歌い、あちらこちらを歩き回るのである。ゆえにコックとテールリンクはこれを「ぶらんこ遊び」と呼んでいる。^{注13}

「クレー、クレー、女の子ちゃん

小さな子は櫂の木の上に座る、

一、二、三^{注14}

またある地域では「小さな教会の中の幼いイエス様」と歌われた。

「この小さい子は塔の上、

わたし達のマリアさまはあそこまで行けない。

わたし達のマリアはあそこまで届かない、

一、二、三……」

なおドイツではイエス様ではなく、「天使運び」Engeltragenともいっていた。ここで注目したいのは、この



図16 ブリュエゲル「子守ごっこ」（「子供遊戯」の部分^{注15}）

三人の子供たちの遊びが、16番の子供椅子と関連しているのではないか、というハイディングの指摘である。^{注15} すなわち年長の子供たちは「子

守ごっこ」にこれを使い、小さな子をこの「子供椅子」の「おまる」に座らせる躰の遊びをしたばかりである、という。

20、太鼓とたて笛 Trommel en Fluit (図17)

女の子が肩にかけた太鼓を右手で打ち、左手でたて笛を吹いている。ハルトマンとレンスはこの太鼓をロンメルポット *rommelpot* と名づけている。^{注16} それは壺の口に豚の膀胱の皮を張り、真中に穴をあけ、棒を出し入れして鳴らすフランドル独得の民俗楽器である。ブリュージュの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」で前景左の仮面の人物がこの鳴物ではやし立てている。しかし筆者はこの女の子のもつ楽器の形や打ち方から、壺の口に皮を張ったロンメルポットのように思えない。むしろ「猿に荒される行商人」(図7)にもみられる普通の太鼓ではないだろうか。たて笛は当時ポピュラーな子供の楽器で、ブリュージュの銅版画「行商人の手前みそ」(図18)でも、同種類の笛が画かれている。近年アムステルダムで十六世紀

のたて笛が発掘されたが、その写真(図19)はこのブリュージュの子供のもつたて笛にも近い。

21、お粥のかきませごっこ *Brij roeren* (図17)

小さな女の子が道路で見つけた汚物を棒でかきませながら、お粥遊びをしている。ブライというのはフランドル特有のお粥状のプディングで、小さい子供たちにとって、好物のブライのかきませごっこはもともと愛好した遊びのひとつのようだった。しかしJ・ヒルズは、汚物を棒の先につけて友達の下にもっていき面白がる悪童の遊びと解している。^{注17} とくにこの情景のすぐ左横に16番の「子供椅子」(ヒルズもこれを *Kinderkipchen* と呼んで、「おまる」と見なしている)があることから、この子供は人糞をかきませている、と述べている。ラブレの列挙した子供の遊戯にも「黄金髭あそび」*A la barbe d'oribus* という種類があるからであろう。

(続く)

注1 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel*
den Oude verklaard, Antwerpen 1941, p. 3.

注2 「子供椅子」にも、単なる座るだけのものと、便器をかねているものがあることについて、ヘルギーの民俗学者J・ウエインの研究書に詳しく、J. Weyns, *Volkskuisraad in Vlaanderen*, Brussels 1974, p. 384ff.

注3 *De Megere*, op. cit., p. 3.

注4 *Idid*, p. 3.

歌詞の中でホーテ・パトートンは原語で *Hote patoten* だが、おさむくナツノテンに因んで子供の作つた擬声語



図17 ブリュエゲル「太鼓とたて笛」と「お粥のかきまぜごっこ」（「子供の遊戯」の部分㉔㉕）

であらう。ただし *Patoot*（複数

Patoten）は Van Dale の辞書では背の低い肥った醜い婦人という意味であるが、ここでは前後の関係から、そうした意味は含まれていないように思われる。

注5 Guts Muths, *Spiele zur Übung und Erholung des Körpers und Geistes*, Leipzig 1893, S. 381.

注6 Esamangart und E. Johannau,

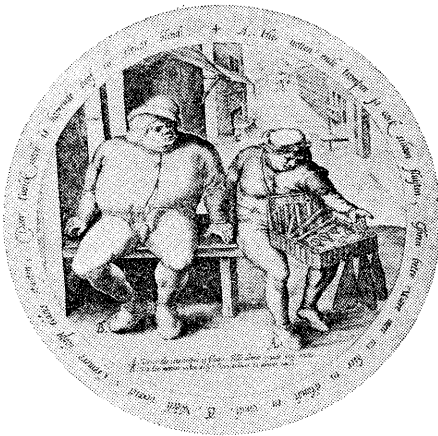


図18 ブリュエゲル「行商人の手前みそ」銅版画

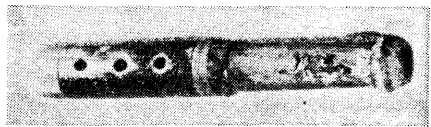


図19 たて笛、木製 16世紀 16.3cm
アムステルダムで発掘

- Rabelais, Bd. I, S. 409, Anm. 57.
- 邦¹ Hartman von Ouwe, 1200, 舞臺¹ F. v. d. Hagen, p. 46.
- Minesinger I, S. 328, 60, 1, 4.
- 邦² Hugo von Trimberg, *Der Renner*, 1347, 舞臺² G. Ehrismann, Bd. I, S. 111, 11, 2693-2701.
- 邦³ Salomon Trismosin の *Splendor solis*. ホリシナルの写本は一五二五〜五〇年の間にユーンで書かれたが、本誌に掲載の図版は一五八二年版のものである。
- 邦⁴ Jaques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 2.
- 邦⁵ Jan Pluis, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 12.
- 邦⁶ 舞臺の使田じらトキバニは Jacob Cats, *Kinder-spel*, Saint-Omer, 1855, "Op Stokje Ryden", pp. 40-43. 244頁
- 邦⁷ 舞臺は *Huwelyck*, Amsterdam 1625.
- 邦⁸ A. De Cock en Is Teirlinck, *Kinderspel en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. Iv, S. 317-27.
- 邦⁹ De Meyer, op. cit., p. 4, "Koele, koelmeiken……" の一ページに於て舞臺の舞臺である。
- 邦¹⁰ Karl Haiding, *Das Spielbild Pieter Bruegels*, Berlin 1937, S. 63. 4ページの舞臺の舞臺である。
- 邦¹¹ G. Hartmann en E. Lens, *Héél Joh!*, Amsterdam 1976, p. 46.
- 邦¹² Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspele* 1560, Wien 1957, pp. 21-22.

(東京工芸大学)

